

優秀賞（国土交通事務次官賞）
〈作文（中学生）の部〉

『防災の主役は私たち』

矢板市立片岡中学校 三年 津久井 杏樹

「津久井さん、この記事を見たかい。」

国語の先生から五月四日付けの下野新聞の切り抜きを見せてられて驚きました。「お丸山公園再崩落」と大きな見出しが出ていたからです。お丸山公園は、隣のさくら市の城跡で、昨年（二〇一一年）九月に大崩落を起こし、ようやく復旧工事が軌道に乗ったところでした。再崩落の数日前、「お丸山で温泉再開を目指す」という記事が新聞に載ったばかりだったのです。犠牲者が出なかったのが不幸中の幸いでしたが、崩落現場の近くには崩落のためにクローズ状態の地元自慢の温泉施設もあり、復旧工事の順調な進み具合に期待を膨らませていた地元の方たちの落胆はどれくらい大きかったことかと考えると本当に胸が痛みました。昨年の崩落も、今年の再崩落も、東日本大震災でできた地面の亀裂に大雨が影響を及ぼして起こったものでした。私の家は石材店を営んでいます。父や祖父の話だと東日本大震災による地盤のずれやゆるみは非常に大きかったようです。土砂崩れが起ったところや地面に亀裂が入ったところは言うまでもありませんが、土盛りをして建物を建てた場所も大きな被害を受けたとのことでした。

今年のゴールデンウィーク、前線を伴った低気圧の影響で日本各地が大雨に見舞われました。栃木県内でも二十四時間の雨量が数カ所で二百ミリを超え、十九カ所の観測地点のうち十六地点で五月の観測史上最大を更新しました。二十二市町に大雨警報、十市町に洪水警報が出されました。ここ数年、大型台風の影響やゲリラ豪雨などによる大きな水害のニュースが相次ぎました。私たちの想像以上に土壌の緩みや土砂の流出が進んで、私たちの身の回りでも土砂災害の危険性ははらんだ場所は、確実に増えていると思います。

記憶に新しいのが昨年秋の紀伊半島山間部で起きた土石流や崖崩れです。ある町長さんは奥様と間近に結婚を控えたお嬢様を亡くされました。それでも悲しみをじっとこらえ、町民の先頭に立ち、復旧に取り組んでいらっしやた姿には心を動かされました。「想定外だった。」「防ぎようがなかった。」そんな言葉では割り切れない思いが私にも残りました。お丸山は足利家の城跡で、四〇〇年以上もどっしりとその場にそり立ってきました。町の守り神であるお丸山が崩落するなど、誰も思いが及ばなかったといえます。

「実はお丸山だけでなく、その近くでも崩落が次々に起こっているんだよ。ここなんかは君のお父さんやお祖父ちゃんの作業場のすぐ近くなんじゃないか。」

と、先生は今度はご自身が撮ってきたという崩落の写真は何枚か見せてくださいました。確かに見覚えのある風景で、家族が大きな災害の危険と背中合わせで仕事していたことを知って背筋が寒くなりました。

けれども、身近で大きな災害でも起こらない限り、自分自身でそのことに注意を払い、自ら災害に備えることはほとんどないのではないのでしょうか。私自身を振り返ってみても

新聞記事でお丸山の復旧工事については知っていましたが、そこに大きな危険が潜んでいるなんて考えもしませんでした。東日本大震災のときの津波や福島原発の問題に限らず、私たちは最近「想定外の出来事」という言葉をよく使います。崩落の危険性のあったところで家族が働いていたのも、私にとっては想定外でした。想定外というのはめつたにないはずなのですが、近年の自然環境の変化で、想定外の出来事は身近に起こりうるのです。

だからこそ、自分の安全を、命を守るために、主体的に防災に取り組まなければならぬのだと思います。東日本大震災のときに、ほとんど犠牲者を出さなかった岩手県釜石市では、中学生が主体的に判断力を発揮して、小学生を安全に誘導し、さらには高齢者施設の人たちを津波から救いました。釜石市の防災教育に携わった群馬大学の片田敏孝教授はどんな状況にあっても、自分で判断し適切かつ迅速に対応しようとする姿勢を育てるために、避難に関する三原則を教えました。「想定を信じるな」「その状況下において最善を尽くせ」「率先避難者たれ」の三つです。また片田教授は「一人ひとりが自分の命に責任を持つことが大切だ」ともおっしゃっています。つまり「防災の主役は私たち一人ひとり」なのです。

お丸山の崩落をきっかけに、私は今まで周りに余りにも無関心だった自分をまず反省し、自分の目でいろいろなことを見直すことにしました。想定外の何かがあったとき、こういうことが役に立つかもしれないと思ったのです。「土砂災害とどう付き合っていくか」は、私たちに突きつけられている、これからの課題です。そして、「自分から何をやったか」が自分の家族の安全を守るために問われるのだと思います。